

# 関西農業史研究会報

No9.1979.11.10

第22回例会は、10月6日に8名の参加のもとで開かれました。以下に当日の岡光夫先生の報告要旨と討論要旨を紹介いたします。なお、詳しくは、『日本農書全集』第16巻の『百姓伝記』巻一～七、同17巻の『百姓伝記』巻八～十五と岡先生の解題を後参照下さい。

## 第22回例会 1979.10.6 岡光夫氏「百姓伝記について一著者像と現代的意義一」

### 1 『百姓伝記』の著者像

『百姓伝記』は成立年代も著者も不明で、長い間このすぐれた大きな書物は湯の目を見ることなく、幾人が人々によって筆写された伝えられてきた。現存の筆写本も幕末よりあまりさかのぼれない年代に筆写されたものと推定され、原本あるいはそれに近い古いものはまだ見つからず、不埒の星のもとに生れた廖書である。『百姓伝記』という書名は、多くの百姓の口伝を記述するという意で、個人の伝記ではない。以下『百姓伝記』を『伝記』と略称する。

『伝記』の著者が不明なのは、この書の定本をみない程度で、著者に何が起ったことが原因しているのだからと思われ、未定本と思われ、巻の第一は、記述する定して録にあげた頃、自の中づ、未記述と終れ、ている部分が植当にあり、とくに巻四の樹木、巻六の肥料、巻七の作物、巻八の道具等に非常に多いこと、第二に、表現に前と後と距離を生じているところがあること。



を反映したものとみなしている。

しかしながら、この工事が国役普請で幕府が主宰したのであるから御当家というのは徳川家（徳川家）を指し、因幡藩を指さない。また米津清右衛門も本多家の家臣ではなく幕臣である。さらに米津出守守の親は慶長五年には旗本で関東と所領をもち、以後三河との関係は絶たれ、岡崎藩の家臣ではない。したがって古島氏の指摘した方法からは、因幡藩や榑野先の横須賀から『伝記』の著者は浮かぶが、ここにはない。

『伝記』の著者は徳川家を「御当家」と称しているのであるから幕臣ということになるが、三河においては家康が三河を領して来たころに、一、二代前の先祖が家康の被官（給人）で、兵農分離後に百姓化した者ごも、慣行として徳川家を「御当家」と称している。農業に明るい面を考慮すると、この層の可能性が高い。

『伝記』の記述内容からみると横須賀周辺について巻七の「防永集」だけは詳細であるが、農業の記述は全く見られない。それに対し三河については矢作川沿岸の村落のほか、名倉砦石や鳳来寺の砦石、吉田の鋸石や砂、里芋の産地の足助、甜瓜とその他の品種の瓜を産する女城の産地等、農業の記述に産地村落をあげており、したがって著者は三河の事情に通じ居住している可能性が高く、三河の農業を念頭に置き、比較の上で他の地域の農業やその他の事情を指摘したと思われる。

## 2. 『百姓伝記』の現代的意義

① 小農技術の源流としての『伝記』  
『伝記』は日本最古に属する農書で、太河川下流の農村地域を背景とした、近世初期の農業技術の総合的研究書で、その目的として小農技術の体系化を目指した書である。今日の日本の小農経営の源流を歴史上に求めるとすれば、太閤検地を経て幕藩体制下に成立した小農経営がその母体となるのである。またここで培われた農業技術の基礎となるのである。

この書は矢作川沿岸農村の危機（洪水、地力低下、排水不能）に對する著作であり、参考にすべき技術書のない時代に、農民から学び、自分でも実験してまとめた著作である。こうした内容をもちつつも『伝記』は長く出版工しなかったが、この著者のよくな人達の知識が蓄積され伝承されて、今日の日本農業が形成されたのであり、そういう意味で記録として残ったこの書の存在は貴重である。

後代に著わされた農書に比較して、砒石や馬具、水利、生産と生活を結合させた厚敷の書き、雑草等はこの著者独特のものであり、また当時の知識人の救済の一つであった中国の陰陽五行説を農業に適用した最初の書として、その獨創性と先見性を評価することができよう。

### ② 実験から得られた肥料の知識

この書において肥料は地方回復の原動力から、とち力を注いだものの一つであり、それも実験から得られたものである。肥料を幼根を成長させるための「根肥」、茎葉を繁茂させる「草むき肥」、結実のための「実入肥」(穂肥)と、作物の生育過程に応じて施肥を考慮し、大豆の「じゅすねだま」(根瘤)をまかない方法などの除草、採取食物と人糞尿の肥効関係などを指摘している。以上述べた諸点は、農民の創意こそが生産力の起点であることを示している。

### ③ 水害の予見と対策

著者の居住地付近は、当時日本の洪水地帯の一つであり、農業は一面では洪水との闘いであった。著者は水害を予見し、その対策を教えている。これは河川流域で留意すべき点を示したのであるが、いまだ自然災害の多い現代日本の農民への貴重な警告である。

### ④ 国土の保全(自然保護)対策

河川上流部のゆきすぎた新田開発によって山林が荒廃し、下流地域に損害を与えたが、著者は洪水を防止する根本の対策を自然保護に求めている。これより先の寛文朝に幕府は「山川掟」によって植林を奨励した法令を出したが、それには具体的な方法について何ら示されていない。まして財政的援助も与えなかった。著者はこの法令を具体化した。また当時の農民は国土の保全のために並々ならぬ労苦と犠牲を払って自然を守り、これが現在に受け継がれたことを我々を省みなければならぬ。

### ⑤ 雑種についての考え方

いうまでもなく、作物は種子を選ぶことが重要であり、種子は生物の根源であり、作物の生産力を内包する。種子がよくなると他の条件が整っていてもよい収穫をあげることができない。伝記は種変りすなわち品種の特性の変質化を説いた最初の農書と思われる。これは後の農書が宮崎安貞の「草木雑論」にもとづく雑種の選出に追随したのに対し、採種の目的が「種変り」の防止にあることを明白にした点で科学性を評価することができ、同時に旧慣からの脱出に農業発展の一つの道がある事を我々に示している。(岡光夫氏)



1979・10・27～28と金沢で「農書を読む会」が開かれ、京都からも数名の方が参加しました。以下に二つの紹介記事を掲載します。

●住職や主婦ら80人参加

「農書を読む会」という新しい学会が、十月十七日、金沢で発足した。何でも東京からという今の世の中に、金沢で学会が始まったというので、この学会のユニークさが端的にあらわれている。全国から約八十人が参加した。大学教授だけでなく、お寺の住職や主婦の主婦も参加した。この会、この学会の特色がある。「農書」といって、江戸時代の農業に関する書物のことである。二十世紀も八〇年代に入るとする現在、なでなで「農書」をおく、おもしろい人があるも知れない。

会の会期は、農書を読みながら、農業近代化の真の前進を明らかにする、と書かれた「おもしろい」をいかに代へる人も多かった。農業近代化といえは、農作業の機械化をすすめる、農薬を使い、化学肥料を使うことだが、なんのために、古くは江戸時代の農書なども読まなければならぬのか、とおもしろい人もあるも知れない。

●中国で盛んな農書復刻  
まずわたしたち、ひとりの思いを出せかたを許して貰いたい。今からちょうど三十年前、中国革命が成功して中華人民共和国が成立した後、中国では古い農書が盛んに復刻された。なにしろ古い国だから、二千年以上も前の

『呂氏春秋』からはじめて、十八世紀の『授時通考』にいたるまで約四十冊の農書が次々に復刻された。それについての研究書も出版された。日本では五十五年戦争で六六六によって国内に輸入された。国土は荒廃し、食糧は不足し、まず何をあつても農業の復興

わたしの耳に達したのは、中国における鍼灸の発見という驚くべきニュースであった。そのとき突如、目からウロコが落ちるやうに、革命直後の古い農書の復刻と研究の意味がきらきらかになった。日本では医学にかぎらず、近代化しようとするとき、古いものは一切捨てて外国の文化や技術を

# 農書を読む会

79.11.6 朝日新聞



飯沼 二郎

## 真の農業近代化へ伝統探る

### 不自立農家育てた今の農政

を導くしよとする。ところが、中国では古い医学をすてずに、その基礎の上に外国の進んだ医学を導入しようとする。だから日本の近代化は、つねに「先進国」の模倣だが、中国の近代化は、鍼灸師のような驚くべき独創を生み出すのだ。革命直後に農業の近代化を考えたときにも、まず第一に古い農書を読み、そこから中国農業の伝統を見いだそうとしたのである。たか（農業には、時代とともに変化する面と、変化しない面がある。その変化しない面をこころでは「伝統」といっておきた

一冊に作ることにすすめていた。つまり、日本の農業近代化は日本農業の伝統を否定したが、中国のそれは中国農業の伝統をまずまず発展させているのである。この二十年間、おなじ近代化をすすめるなら、日本農業は急速におとろえ、中国農業は急速に発展した秘密を解く力半ばではなかった。

●自分の力にあまる規模  
今回は、三人の地元の方々（二人の農高校長と一人の農協指導部長）の講演があったが、それは江戸時代よりよきかほはな（一貫するものは、現在の農政に対するはつきりした批判的態度であった。農書はすべて農民の自

立を目的として書かれても、この二十年間の農政もまた自農家の育成をこころいひてきたが、本道は何ぞをすべきなのか。自立農家といえは、家計の豊饒はすべて、細に還元し、肥料もできるだけ自給する農家をこそいっへきなの。農政は、自分の力にあまる五十頭、百頭の家畜を飼ひ、したがって飼料はすべて外部から購入し、養分はすべて外部へ放棄する不自立農家を自立農家の名において補助金によって育成してきたのではなかったか！このような農政によって、真の自立農家が次々に壊されてきたのである。えらい先生がたて構成される農協関係の学会よりも、「農書を読む会」の素人たちのほうが、はるかに農政にたいする批判は明確である。

●（富山県）の農書「私家農業談」正統を著した宮永家を訪れ、高前で謁見し、会長・古島敬雄氏（東大名教授）が会員を代表して答へた。会は、今後、定期刊行物を発行し、研究会二年一回の集会をおこなうべく予定である。今後の発展が期待される。（東大人文科学研究所教授・農業経済学）

●（富山県）の農書「私家農業談」正統を著した宮永家を訪れ、高前で謁見し、会長・古島敬雄氏（東大名教授）が会員を代表して答へた。会は、今後、定期刊行物を発行し、研究会二年一回の集会をおこなうべく予定である。今後の発展が期待される。（東大人文科学研究所教授・農業経済学）

●（富山県）の農書「私家農業談」正統を著した宮永家を訪れ、高前で謁見し、会長・古島敬雄氏（東大名教授）が会員を代表して答へた。会は、今後、定期刊行物を発行し、研究会二年一回の集会をおこなうべく予定である。今後の発展が期待される。（東大人文科学研究所教授・農業経済学）